

<p>校長室だより</p> <h1 style="text-align: center;">共学共高</h1>	<p>第 3 号</p>	<p>令和3年5月31日発行</p> <p>発行責任者 白梅学園高等学校長 武内 彰</p>
---------------------------------------------------------	----------------------	--------------------------------------------------------

## 「生徒間の対話のある授業」part 1

校長室だより第1号でも述べたが、私は、先生方に「生徒間の対話の場面がある授業づくり」をお願いしている。それは、生徒が自分の頭で考えること、考えたことを表現すること、対話を通して新たな気づきや思考の深まりが得られること、そして、こうした集団での学びの意義や意味を味わうことが、個での学びへのモチベーションにつながっていくと考えているからだ。

5月下旬、そうした取組を実践している先生の授業にお邪魔した。

### G先生の2年生物理の授業(5月28日)

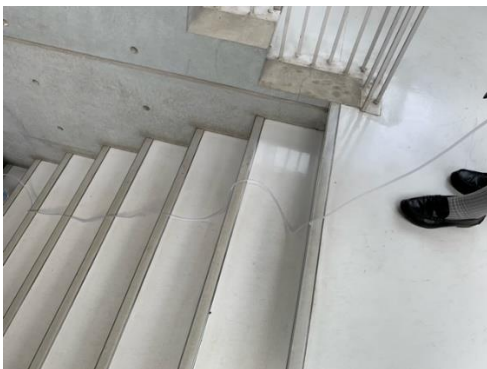
大気圧についての学びがテーマである。先生からの問いは、「容器に水を満たし、その中にストローを差し、人の口で水を吸い上げる。このとき、地上から何mの高さまで水を吸い上げることができるだろうか。」というものである。

生徒の予想は「10m」とホワイトボードに記載されている。(ちなみに本校の教室には黒板がない。代わりにホワイトボードが設置され、同時にプロジェクターも備えられているので、かなりICT設備が整備されている。また、1年生と2年生は一人1台の端末を持っており、それらを活用した授業も至る所にある。)

実際に実験してみるようになった。生徒たちは役割分担をして教室を出ていく。1階に到着すると、水の入ったペットボトルにチューブ式のストローの一端を差し、他端を持って階段を上がる。校舎の1階から2階、3階、4階と徐々に高さを増やして実験。2階、3階でも水を吸い上げることができた。いよいよ4階である。最終的に「顎がつかれた」「舌が痛い」などと言いながら、2人の生徒たちは4階でも水の吸い上げに成功した。

階段1段の高さは16cm、段数は64段あったので、1階から4階までの高さは、約10mとなる。何と、生徒の予想通りの高さまで吸い上げたことになる。教室へ戻って先生が生徒たちに問いかけながら、解説。生徒たちは臆することなく、発言していく。最終的に、ストロー内の「水にはたらく重力」と「大気圧による力」とのつりあいを考えればよいことが共有され、高さの理論値を求めることになった。こうして理論値と実測値とがほぼ一致することが確認されることになる。選択科目であり、少人数ということもあるが、生徒たちは互いに開かれた関係を築いており、反応が良い。今回は、生徒間の対話

というよりは、先生と生徒との対話に重きが置かれていたが、いつでも率直に考えを出し合える関係であることが私にも感じ取れた。



### S先生の2年生現代文Bの授業(5月29日)

貨幣経済に関する論説文についての学びがテーマである。先生からの問いは、「お金はあなたにとってどういうもの？」というものである。Aさんは、「自分を満たすために必要なもの。」Bさんは、「自分が好きなもののために使うもの。」と発言する。

次の問いは、「文章中にある『貨幣商品起源説』とは何か？」というものである。そしてすぐに「ペアで話し合いなさい。」と指示が出る。生徒たちはすぐさま活発に意見交換を始めた。

先生「間違えていてもいいからね。どんな意見が出ましたか？」

Cさん「物々交換していると、耐久性がなかったり、保存がきかなかったりする問題があるから・・・」

先生「そうですね。保存がきくもので交換していくために貨幣が出てきたのですね。」

次の問いは、「紙幣や硬貨が貨幣として定着したのはなぜか。記述しましょう。」である。生徒が一人1台持っている端末から記述したものを一瞬にして教室のホワイトボード上に映し出すことができる。ここで、先生から追加の問いが出される。「記述の中に入れなくてはいけない3つの要素は何ですか？」

Dさん「品質が落ちない、容易に持ち運べる、価値が安定している。」

先生「そうですね。この3つを押さえる必要があります。」「では、Eさんの記述を映し出してみよう。」

先生「先程の3つのことが網羅されていますね。そして文末が『～から』と問いに正対した結びになっていることと、最後に貨幣についてまとめられているのが良い点ですね。」

こうした生徒間による対話に基づいた読解が進められていくのである。授業に参加した一人の生徒に感想を聞いてみた。すると、「(対話を通して)友達の考えがわかるのがいい。」

と返ってきた。

生徒たちの様子を見ていると、授業内で考えることや友達同士で対話をするの意味を理解してくれているな、と感じた。先生から対話を促されて、それに対して積極的な取組をしてくれていることも嬉しい限りだ。

これからも白梅学園の授業を紹介していきたい。



(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)